医学情報は誰のものか：日本医学図書館協会 創立 70 周年記念講演会

高 野 史 子*

東京医科大学図書館

1927 年（昭和 2 年）生まれの日本医学図書館協会は 1997 年に創立 70 年となり、記念事業としてアメリカの国立医学図書館（NLM）館長 Donald A. B. Lindberg 博士および作家の柳田邦男氏を迎えた講演会と記念式典、祝賀会を行った。

日 時：1997 年 10 月 13 日（月）13：00～19：00

場 所：日本大学会館（東京都千代田区）

主 催：日本医学図書館協会

共 催：全国医書同業会，医学中央雑誌刊行会，
科学技術振興事業団，（株）日立製作所

入 場 料：¥5,000

記念講演会：13：00～16：00

講演者と演題：

Donald A. B. Lindberg

「The Modern Library」

柳田邦男

「図書館を生き方・死に方の情報センターに」
（座長：開原成允（東京大学名誉教授，国立大蔵
病院院長））

日本大学会館 2 階のロビーは大勢の人であふれ
華やかな雰囲気であった。第 5 回国際医学図書館
会議（1985 年）を思い出した。と言っても何の

ことかわからない人は多いだろう。当時の日本医
学図書館協会が総力をあげて取り組んだこの会議
はまさにここ日大会館で開かれたのだ。懐かしい。
それにしても今回の講演者選びは見事だった。一
人は医学図書館界のスーパースター，NLM の館
長リンドバーグ博士。もう一人は筆力・説得力十
分で医学分野でも積極的な活動が続けている柳田
邦男氏。座長は，医療情報の理論実践家，前日本
医学図書館協会会長の開原成允先生。お膳だてを
された川村貞夫現会長と準備委員会のみなさん，
ありがとう。

I. リンドバーグ博士

誰にでもどこにいても無料で医療情報を

座長の開原先生はリンドバーグ博士がミズーリ
大学教授だった頃からの知り合いという。博士の
講演はビデオ 2 本をはさみ現在の NLM の活動と
将来の姿を紹介した。NLM 紹介ビデオは日本語
版。実際に NLM の見学ツアーに行くとならずビデ
オの上映があるが，日本語版も準備されている。

博士は現在是不確かなことでも 15 年後には確
実になることもある，医学図書館の人々はその変
化の可能性を知っておくべきだ，と言った。残念
ながら多くの人たちが伝統的な図書館サービスは
十分ではないと考えているとも言う。このような
基本的な考え方の上でいくつかの新しい活動につ
いて述べた。

*Nobuko TAKANO：〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-7-1.
ntakano@tokyo-med.ac.jp

（1998 年 1 月 20 日 受理）

NLMでは市民のための無料電話サービスを設けた。医学の専門的な資料は難しくはあるが、患者や家族は一生懸命知ろうとしている。このような相談電話には適切な資料を教えてあげるといふ。Visible Human Databaseは人体解剖のデジタル画像情報である。これには26カ国の850におよぶライセンスが関わっているそうで、そのうち24のライセンスは日本のものとこと。この研究は先進7カ国(G7)の新しいプロジェクトであり、多言語機能を付加しようというものである。Visible Human Dataは直接知識にアプローチするKnowledge Baseである。ここでは英語版のビデオを用いて、いくつかの人体画面を紹介した。落馬事故で脊髄を損傷し車椅子生活をおくっている俳優のクリストファー・リーヴの損傷部分の画面も出てきた。デジタル・ライブラリーについては現在はまだはっきりしない事項も多い。たとえば電子出版物のarchiveコピーがどこに搭載されるのか、など多種の質問があっても答えはわからないのである。しかし1989年にHPCC(高度情報流通基盤整備計画)法案に先立って達成目標を掲げ、研究開発した結果、今日みるような多数の成果を得た。当時そのような目標は不可能だと反対した人たちは1997年の現在には今度はインターネットは壊滅するだろうと言っていると述べる。数値目標も重要だがさらに重要なのは次のような考えを達成することだとリンドバーグ館長は続ける。「将来のシステムはもっと重要な仕事をしてくれるだろう」「色々な研究結果や解決策が全国レベルから国際的レベルに高められていくだろう」「新しい情報技術を持つことで基本的な社会目標を達成することができるようになるだろう」。これらの目標を医薬、医療の図書館の世界にあてはめてみると次のようなことになる。「どのような医師であれ患者であれ、個人的に最新の学術情報を電子的にアクセスできるようになる」「患者情報のプライバシーを守りつつ遠隔医療接続が可

能になる」。そして課題として、病院活動の中で患者のプライバシーを守る手順が確立すること、サービスの質を高めるために高速ネットワークを確保することを指摘した。

新しい利用者

「人そのものが変わるのか？」次にリンドバーグ博士の話の方向が突然変わったように思えたのだが、読書障害(学習障害、視覚的学習)について話を始めた。文字や数字の教育では多くを享受できない、したがって図書館の利用者にはあまり適していない「読書障害者」と言われる人々がいる。歴史上の大知識人のレオナルド・ダ・ヴィンチ、アインシュタイン、エジソン、ウィンストン・チャーチルなどの名前をあげ、普通の読書や学校教育は苦痛だったこれらの偉人たちが「読書障害者」で、しかし視覚からははるかに知識を吸収できるのだという。ダ・ヴィンチとアインシュタインの例をひき、本を読む場所としての今までの図書館には決してやって来られない人々のほうが変わるのではなく、図書館が次世代ネットワーク、電子図書館の研究を続ける努力をすることによって図書館の新しい利用者を得る可能性を指摘し、その結果、現代の図書館が再び知的生活の中で、また科学の進歩の中で最高の地位を占めるようになるだろうと述べたのだ。日本医学図書館協会の次の70年の更なる発展を祈って博士の講演は終わった。

情報の無料化

聴講者からの質問は愛知淑徳大学の野添先生、科学技術振興事業団(旧JICST)の荒木氏、そして座長の開原先生自身である。MEDLINEを無料で提供するようになったこと、無料電話相談サービスを提供するようになったこと、情報は有料だ、という「アメリカ的な姿勢」は変化したのか、というどれも(今から思うと)お金にまつわる質問

だった。どの質問にも博士はそれぞれに答えたのだが、一貫していたことは、国民に最高の医療を受けてもらおう、最高のアクセスを提供しようというNLM、つまり国の姿勢があったことだ。がん情報や遺伝子転写マップなどのデータベースを例に、どの情報は医者向け、どの情報は患者向けと分けることは無意味になると確信している、と断言した。転写マップデータベースはトップの科学者を対象にした完全に最新のコンテンツを提供できるようにしたデータベースである。高校生でもアクセスは可能であるという意味ではこの種の最初のデータベースあり、これを利用して今後高校生たちが新しい発見をしていくのは確実だ、時代は変化している、専門家だけの情報というのは古い考え方になると述べた。情報の無料公開は一時的なことかという質問には、民間機関も参入できるようにしている、これは上院の歳入委員会で決定したことであり、後戻りはしない、と答えた。MEDLINEが無料入手可能になりJOIS利用者の数が激減したであろう科学技術振興事業団の当惑と腹立ち（失礼）がうかがえると思ったが、私はそれ以上に情報技術の裏付けと並行した医療に対するアメリカという国の姿勢に感じ入ったのである。

社会目標の達成のために

NLMはその名のとおりアメリカの国立、つまり国民の図書館である。直前の前身は国防省に属するArmed Forces Medical Libraryであり、その膨大な資料を引き継いでいる。しかし新たに提案され採択されたNLM設立法案はNLMを保健省公衆衛生局に属させ国民に直接奉仕する機関とした¹⁾。ワシントンDCにあるArmed Forces Medical Libraryから離れて、隣接したメリーランド州ベセスダの地に新図書館を建設したのは、ただ老朽化した建物を新設したかったのだけではないだろう。国民の健康・教育・福祉という保健

省の正式名称にあるように、そのことを実践できる時代になると同時に実行に移した態度は国の財力の問題だけではなく、地に足のついた理想主義なのではないかと私は思う。

II. 柳田さん

ユーモアとは「にもかかわらず」笑うことである

休憩時間になって、会場内が超満員で追加の椅子が運び込まれた。講演の第二部は柳田邦男氏の登壇である。開原先生は、1987年第22回日本医学会総会閉会講演を柳田先生にお願いした縁があり、その時の内容²⁾は「医療の専門化」への批判を含んだ忘れられない名講演だったという。

柳田さんはやや緊張した口調で始められた。氏の講演は、「ものを知っているということが命を支える上でどんなに大事か」「図書館はそのような命、人生を支えられるか」という基調の上に立っている。病気のことを知る図書、闘病記、元気づけるためのユーモアの本などがいかに病気の人を支えるか、いくつかの図書を体験を通して丹念に紹介した。以下の書誌事項と一言は私の聴講メモから補記したものである。

- 1) 死の淵からの生還：現代医療の見失っているもの（Cousins N 著、松田 銑訳、講談社、1981）ユーモアの力
- 2) 肝・胆・脾の臨床検査の読み方（鶴沼直雄監修、メジカルビュー社、1989）これを読んで治療を受ける気になった
- 3) 死ぬための生き方（新潮45編集部、新潮社、1988）アンソロジー
- 4) 死別からの回復（Parkes CM, Weiss RS 著、池辺明子訳、図書出版社、1987）残された人の心のケア
- 5) 対象喪失：悲しむということ（小比木啓吾著、中央公論社、1979）4)と同じ、残された人の心のケア。症例集

- 6) 元気が出るインフォームド・コンセント (厚生省健康政策局総務課監修, 柳田邦男編, 中央法規, 1996) 患者も医者もともに生きることのできる元気の出る新しい関係。医療現場におけるコミュニケーション
- 7) 君と白血病: この1日を貴重な1日に (Baker LS 著, 細谷亮太訳, 医学書院, 1992) 病気を知る

現代は病院中心の医療の時代で、これは重装備医療である。こういう時、病気や死についてよく知らない人と普通の人は、何が何だかわからずにその状況に巻き込まれてしまい、病気のことを考えたり、静かに看取ることがむずかしい。本は知識としても、また他人の闘病記による生き方を参考にするためにも力になる。今は自分の死を創る時代なのだ、と述べる。

また現代を情報公開の時代としても特徴づけ、診療現場におけるコミュニケーション、診療記録、レセプトなどの公開は世界的な流れであり、これらは患者自身の判断の根拠としての知識となると指摘する。多くの情報に一般人がアクセスできることが大事だと語る。

医療現場でのコミュニケーション

次に柳田さんは「死の準備教育と図書館」について紹介した。上智大学のアルフォンス・デーケン先生は1980年代前半から「死への準備教育」を提唱してきた。また1996年の「死の臨床研究会」で柳田氏は「学校の教室や図書室に命をみつめる図書をおくこと、死別のことばかりではなく、学校で生命を考える見方を養うべきだ」との提言をした。小・中学校からそれぞれのレベルで教える。動物の死、祖父母、友達、ペットの死など。高校レベルでは生命倫理を取り入れる。医学部、看護学校は勿論。ただし医学部でのこの教育は大変遅れていると付言。社会教育としての図書館で

はどうか。病院の図書室には生と死の図書をコーナーとして集めるべきだ。文学、医学書、写真集、詩歌、絵本、エッセイなどのジャンルは問わない。しかしここには利用しやすいシステムと読書案内のできるスペシャリストが必要だ。医者もまた問題意識を持ち、それらの図書を患者や家族に教えてあげられるようにすべきだが、医者と患者の間のコミュニケーションや理解したいと思っていること、知識にズレがある。患者に基本的な広い知識を持ってもらうことが大事で、このことに関して医者の医学以外のことも含んだ勉強が必要だと指摘した。そして解決策として3点を提唱した。

1) 市民運動と図書館が連携すること

尊厳死を考える会、終末期医療を考える会、生と死を考える会など、いま日本でも200以上のグループが存在している。

2) 全国にモデル図書館をつくる

生き方、死に方の情報センターとしての図書館機能のモデル。

3) ボランティア支援システムをつくる

寄付金と労力としてのボランティアが必要。本のこともちゃんと教えてくれる人が必要。

公立図書館、大学図書館、病院図書館は新しい窓を開くリーダーシップをとってほしい。図書館に患者が入って来られては困っている図書館が多い、とギクリとすることをおっしゃる。自著をスライドで紹介し、この頃は自分の本の帯の言葉まで自分で書くコピーライターになっています、と笑わせる。そこまで自分の主張したいことがギッシリあるのだろう。

「フランダースの犬」の物語の中で少年ネルロが「神様十分でございます」と言って息をひきとっていく場面、チェリスト徳永謙一郎氏のホスピスでの最後の演奏後の一筋の涙、これらのエピソードを口ごもりながら静かに説いていく時、氏のご子息の不幸を知る身には感動ひとしおであった。絵本にも命について考えさせる力があることを述

べたのだが、人生の充足の意味を考えるとなくしては「図書館を生き方・死に方の情報センターにしよう」という今日の柳田さんの意図を理解はできないだろう。多数用意されたスライド全部を説明する時間はなかったが最後にキューブラー・ロスの「ターミナル・ケアの姿」をていねいに紹介して下さった。末期の床にある人と「ともにいる」態度の大事なこと。

Ⅲ. 時代は変化する

リンドバーグ博士も柳田氏も情報や図書を専門家だけのものとしてはいけない、そういう時代ではなくなっている、と指摘した。両氏の指摘が一致したがこれは単なる偶然ではないだろう。また従来医者のもと考えられてきた医学情報の本当の利用者は一体誰なのか、真剣に考える時である。話は全然別の分野のことなのだが、折しも来日中の英国のブレア首相があるTVインタビューの中で、英国企業に代わって外国の企業がどんどん入ってくることに英国首相としてどう思うかと問われた時、「雇用の機会は増えるし今は国際化のそういう時代なんです、時代は変化しているのです」と答えたことがたいへん印象深かった。リンドバーグ氏も柳田氏もともに「医学図書館の人々は自分の本当の役割は何なのか、患者が入手できない医学情報というものがあってもよいのか、図書館は

時代の変化に知らん顔しているのか」と言っていると思った。ちょうど手にした「医学図書館」のLindnerさんの意見³⁾も同様の視点で一層関心をひいたのだった。

講演会に続く70周年記念式典では、文部省国際学術局学術情報課林一夫課長、韓国医学図書館協議会姜俊基会長、日本薬学図書館協議会遠藤浩良会長、日本農学図書館協議会葛城昭会長、病院図書室研究会長谷川湧子会長の祝辞があった。アメリカ医学図書館協会会長の祝辞はNLMリンドバーグ館長が代読した。

ひきつづく祝宴は日本医学図書館協会の同窓会のように多数の懐かしい先輩、仲間に再会できた。この貴重な講演をよく噛みしめて日々の仕事に生かしたいと思う。

参考文献

- 1) The Army Medical Library becomes the National Library of Medicine. In MilesWD. A history of the National Library of Medicine ; the nation's treasury of medical knowledge. Bethesda, Md : National Library of Medicine ; 1982. p.343-63.
- 2) 柳田邦男. 今後の医学・医療への期待. 第22回日本医学会総会会誌 1987;(1):4-5.
- 3) Lindner KL. Breaking the boundaries of the medical librarian's role. 医学図書館 1997; 44(4):456-8.